# 研究報告

# 地方創生における都市部総合大学の役割と新しい働き方について

―少子高齢・人口減少時代の大学教育とは―

かわ まこと 一般社団法人 JA共済総合研究所 調査研究部 主席研究員 真ぞう Ш 井 明治大学 法学部 兼任講師 医療経済研究機構 所長 西 周 国立社会保障,人口問題研究所 名誉所長 いち なか ざわ 明治大学 野生の科学研究所 所長 中 沢 あゆむ 和  $\mathbb{H}$ 歩 明治大学国際日本学部3年 りゅうのすけ 萩 隆之介 原 明治大学国際日本学部3年 がわ かん 寬 太 明治大学国際日本学部3年 中 Ш

# アブストラクト

本稿は、明治大学和泉キャンパスで2020(令和2)年1月14日に行われた特別講義の記録である。

ここ数年にわたり、明治大学法学部の授業として「文明論的視座から21世紀のまちづくりについて考える」を主題とする自由講座を開講している。少子高齢化や人口の偏在、格差や紛争、そして難民問題や環境問題のような世界的かつ地球規模で進行する現象も視野に入れ、このような社会的、政治的、環境的課題を抱えるに至った経緯を――近代史をたどりながら――「物語」として理解し、21世紀という時代を展望してもらうことが狙いである。したがって学問領域を横断した学際的・統合学的な講義内容になっている。

また本自由講座を補完することを目的に、JA共済総合研究所では、農山漁村地域での「地域滞在型・異文化体験型インターンシップ」(エクスターンシップ)の実施や、長崎県対馬市における地域再生プロジェクト(対馬プロジェクト)への学生の受け入れなども積極的に推進してきた。2019(令和元)年9月には本講座の受講生から希望者を募り、対馬において「サマースクール」も開講している。

この特別講義は、2019年度の1年間(一部の学生は秋学期のみ)を通して本自由講座を受講した学生たち――ならびに学外活動に参加した学生たち――の感性と想像力に期待しながら、彼らのモノの見方、考え方、感じ方にさらなる刺激を与え、思考の枠組みを広げてもらうために、「対馬プロジェクト」の研究パートナーである西村周三先生と中沢新一先生を講義にお招きして開催した特別企画である。

したがって講義の構成は、まず2019(令和元)年9月に実施した「対馬サマースクール」を経験した学生たちから、現地で感じたこと、気づいたことなどについて率直な意見を述べてもらい、それに呼応するように、教員側から――異なる専門領域の知見を織り込みながら――見解や感想等を鼎談形式で述べていくという進行になっている。

(キーワード) 地方創生・SDGs・PBL・持続可能性・人口減少・里山・ヒューマニズムとコスモロジー

- 目 次 -

- 1. はじめに
- 2. イントロダクション
- 3. 対馬サマースクール活動報告と未来展望 ~これからどんな時代を創っていくのか~
- (1)対馬を通して見る現代社会
- (2) 学生団体発足の決意表明

- (3) 学生の人脈が小さなことから世界を変える
- 4. 〈西村先生のお話〉
- 5. <中沢先生のお話>
- 6. 質疑応答
- ~補遺「対馬プロジェクト」について

# 1. はじめに

明治大学和泉キャンパスにおいて、ここ数年来共通講座として「21世紀のまちづくり」をテーマとする自由講座を開講している。法学部の1、2年生が中心ではあるが、他学部の学生も履修可能であることから、2019年度は政治経済学部や経営学部、文学部や情報コミュニケーション学部などのほか、中野キャンパスからは国際日本学部と総合数理学部、生田キャンパスからは農学部、さらに駿河台キャンパスからは文系学部の3、4年生たちが参加して、和泉キャンパスでの学びの時間を共有している。

受講生は年々増加傾向にあり、今年度の受講者数は330名を超えることになった。授業を通して学生たちに問いかけているのは「21世紀が本当に成長と拡大だけを追い求める時代であっていいのか」という素朴な疑問であり、その問いに対する答えを文明論的な視座から探求していく思考のプロセスがこの授業の骨格を形成している。今年度は希望者を募り(約40名)、2019(令和元)年9月に「対馬サマースクール2019」「を長崎県対馬市主催で開講し、現地でのフィールドワークも実施した。

「対馬サマースクール2019」は、大学教育にアクティブラーニング(積極的・能動的な授業・学習)やPBL(Project-based Learning:問題解決型学習)を導入すべきとする政策要請に呼応し、JA共済総合研究所が推進する「食・エネルギー・ケアを基盤とする農山漁村地域の内発的発展モデルに関す

る研究」と大学教育の融合をはかることで、 学生たちへの教育効果と若年層人材環流による地域の活性化が相乗的に共鳴し、新たな価値を生み出すことに期待して実施した企画である。したがって人的交流とコミュニケーションを重視し、今日的テーマでもあるSDGsやCSVに関する取組みに加え、地域包括ケアの実践やSociety5.0などの要素も組み込んだ体験型の教育プログラムとなっている。

本稿は、地方創生に向けて都市部総合大学が担うべき役割と、超少子高齢・人口減少時代における大学教育のあり方を検証するため、明治大学野生の科学研究所の協力のもとで実現した、学生たちの感性に働きかける新たな体験学習の記録である。1年間を通して本講座を受講した学生たちと、長崎県対馬市でのフィールドワークにも参加した学生たちの意識と行動の変化を探りながら、持続可能な未来を展望してみたい。

### 2. イントロダクション

川井:おはようございます。

今日は新年第一回目の授業ですから、あら ためて、明けましておめでとうございます。

さて、今日は昨年ご案内したとおり、素晴らしいゲストスピーカーの方お二人にいらしていただいています。なかなか経験できないステキな顔合わせの授業になると思いますので、有意義な時間を過ごし、多くのことを学びとって、学生時代の記憶に残る授業にしてもらえたらいいな、と思っています。

そこでまず、少しだけこれまでの授業の振 り返りをします。ゲストの先生方のお話を聴

<sup>1</sup> 共済総研レポートNo.166 (2019.12)「〈連載〉農村生活のすすめ 第17回:「対馬サマースクール2019」について」参照。

く前に、昨年の春からの1年間を振り返り、 秋学期から履修した学生は半期を振り返り、 この授業で学んできたことを思い起こしてい ただきたいと思います。

この授業では超少子高齢・人口減少時代を 俯瞰して、みんなが生きていく21世紀という 時代には、どんな生き方が、どんな働き方 が、そしてどんな暮らし方が求められている のだろうか、ということを想像してもらいま した。そして自分なりの21世紀というものを デザインしてもらうために、多角的・広角的 な視座から話題を提供してきましたよね。だ から時間軸も長かったでしょう。科学革命の 勃興から産業革命を経て、グローバル化の進 展とともに変容する日本人の意識みたいなも のも、この授業の中で取り上げました。

記憶に新しいところでは、イスラエルの若き歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリの『サピエンス全史』と『ホモ・デウス』を題材に、そして年末には彼の三作目となる『21 Lessons』を取り上げて、そこに書かれた内容を確認しながら、これから到来する未来について考えてみようという話もしたと思います。これだけ科学技術の進展がはやいと100年後はもう、予想もつかないよね。とはいえ方向は定めなければならないから、100年ぐらいまで先を見据えて、感性と想像力をフル稼働させて、多方面に意識を巡らせて、現代社会を考察してきたわけですね。したがって過去は300~400年ほど遡り、未来は100年ぐらい先まで見てきたわけです。

また一方で、みんなは情報化時代を生きる グローバル世代だから、好むと好まざるとに かかわらず情報過多になっている。一昔前の 時代とは違って、いまはスマホを持っていれば世界中の情報をそこから取り出せるし、世界でなにが起きているかもわかる。それですべてがわかったような気になってしまうんだよね。でも、本当にわかっているかというと、じつは何もわかっていないのかもしれない。そこにはリアリティがないからね。このような仮想現実の世界を彷徨う意識を解放し、等身大の生活世界へと意識を回帰させるために、この授業では「まちづくり」をテーマに取り上げました。昨年の夏には「対馬サマースクール」も開講して、希望者を募ってフィールドワークも行ったわけです。

そこで今日は、この1年間の授業を締め括るにあたって、これほどの適任者はいないだろうという先生方にいらしていただきました。お二人の先生方は専門分野がまったく異なります。まず西村周三先生ですが、西村先生は経済学者でいらっしゃって行動経済学の権威であり医療経済学の第一人者でもあります。また京都大学では副学長まで務められ、現在は京都先端科学大学で経済経営学部長という要職に就かれていらっしゃいますので、教育の分野にも長きにわたり携わってこられました。そして国立社会保障・人口問題研究所の名誉所長ならびに医療経済研究機構の所長としてもご活躍されています。

中沢新一先生は、もう皆さんご存じのとおり明治大学の先生です。なにより世界的に著名な哲学者であり、文化人類学者であり、思想家であって、現在は明治大学野生の科学研究所の所長でもいらっしゃいます。

そのような先生方が、この授業に参加して くださって、みんなと一緒に議論し、アドバ イスをしてくださるということなんですね。 何を申し上げたいかというと、このような異なる学問分野を深く探究されてこられた先生 方が、この場において、それぞれの見解を述べてくださるということなのです。

だから今回は、授業の進め方についてちょっと工夫をしました。まず、この1年間を通して本講座を受講し、かつ対馬におけるフィールドワークにも参加してくれた数人の学生に活動報告と未来構想といいますか、感じたこと、考えたことを紹介してもらって、それを踏まえて西村先生と中沢先生にお話を伺って、最後にみんなでディスカッションをしたいと思うのです。

それではさっそくはじめたいと思います。 まずは学生報告です。この雰囲気なので緊張 すると思いますが、よろしくお願いします。 どうぞ、前に出てきてください。それでは、 お願いします。

3. 対馬サマースクール活動報告と未来展望 ~これからどんな時代を創っていくのか~

# (1) 対馬を通して見る現代社会

和田:本日は、このような場で発表をさせていただく機会をいただいて、ありがとうございます。西村先生、中沢先生、お越しいただいてありがとうございます。

さて、僕たち、川井先生が授業中によく話してくださる対馬市での活動に参加させていただいているんですけど、去年は大体何をしたかというと、9月に対馬サマースクールということで、この授業を受けている40人ぐらいの学生が一緒に対馬市に行って、8泊9日

でいろんな場所に行って、いろんな人の話を 聴くという時間を過ごしました。

11月にはアカデミックフェスという明治大学の発表会があって、大学内外の教授の方、研究者の方に対馬市での成果を報告しました。今から僕たち3人でやらせていただくんですけど、発表内容はアカデミックフェスでやったものとほぼ同じです。発表内容は、サマースクールに参加した学生1年生から4年生まで、みんなのアイデアが詰まったものになっています。どうぞ、よろしくお願いします。

発表は3つのパートに分かれていて、1つ目がサマースクールの報告です。2つ目が新団体の設立について、そして3つ目が対馬で生きることを選びそうな学生のお話、以上の3つになっております。

さて、先に対馬市がどういう場所か確認しておくと、九州本土より韓国のほうが近いという長崎県の国境離島です。これからその対馬市でのわれわれの活動報告をさせていただくんですけど、最初は対馬市の魅力について再考するところから始まりました。

対馬市の魅力は、きれいな海、おいしいアナゴ、おいしいサザエ、そして歴史をたどれば元寇の舞台にもなった場所であったりします。しかし、僕たちの間ではこのような海産物や歴史的な史跡があるという土地は、結構日本にありきたりじゃないかという話になりました。でも、われわれ参加した学生の中で、例えば価値観そのものが変わった、自分の未来や将来について考えさせられた、という声もあったので、そんな魅力が対馬市には本当はあるんじゃないか、対馬市の真の魅力



#### スライド2



は何なんだろうかということを考え直しました。

今回のサマースクールで、私たちは対馬市で独自の活動を進めるいろんな人々に出会いました。対馬には不思議と持続可能な社会、持続可能なコミュニティー、そして日本の未来について考えて尽力している方が集まっているというふうに感じられました。これらのことから対馬市には精神的、そして環境、経済において持続可能な社会のモデルとしての魅力があるのじゃないかと考えました。われわれ学生は、それをさらに発信していくこともできるんじゃないかという結論に至りました。

さて、対馬市が持続可能な社会のモデルであると言ったんですけど、具体的にそれは一体どういうことなのかというと2つ挙げられます。コミュニティーと、持続可能性についてです。

コミュニティー、人々が集まってつながり を形成する場という意味なんですけど、対馬 市での具体例を3つ挙げたいと思います。

まず最初はこちら、「老稚園いいとこ」という施設です (スライド 1)。対馬の北部 (比田勝) にある施設なんですけど、ここではボランティアの方々の協力によって週に1

回お年寄りが集まって、レクリエーションや体操をしたりして楽しまれているという施設です。ボランティアも、お年寄りも、ワンコイン、500円持ち寄ることで運営の全部をやっています。ここにいる人がみんな笑顔で生き生きしていて、すてきな時間を一緒に過ごさせていただきました。

ここでわれわれは、人々をつなげてコミュニティー形成の支えとなるような施設が、まず自主的に起こったということが理想的なかたちではないかと感じたわけです。東京で過ごしていたわれわれにとっては、これは結構想像できないようなかたちだったという感想がありました。

2つ目は、「貝ロビアパーク」という場所なんですけど、これは対馬の中部の貝口地区にある農園です(スライド2)。こちらでは、「限界集落を元気集落に」というテーマがあります。対馬市の中でも少子高齢化、人口減少が進んでいる地区なんですけれども、ここでは社会福祉協議会などの支援を得ながら、貝口地区の人々が集まって、使われていなかった土地を開墾して対馬の特産品である対州そばを作っている場所です。そのそばを、年越しそばで食べることが目標だそうです。こ





スライド4



んな感じで学生も活動に協力させていただき ました(スライド3)。カレーを作ったり、 バーベキューをしたりしました。

3つ目は「もやいの会佐須奈」という団体 です(スライド4)。これは佐須奈という北 西部の地区なんですけど、地区の高齢者の 方々を中心として60人ぐらいで構成されてい る団体です。佐須奈を元気にしたいという思 い、人と人が結び付きたいという思いから結 成され、市や県の事業に協力しながら、地域 が望むことを実行する団体になっています。 もやいの会は分野を問わず、非常にいろんな 活動を行っているのですけれども、代表の日 高光博さんによると、そういった活動の根底 には「無理をせずにできることをやる」とい うモットーがあるんですね。この「無理をせ ずにできることをやる」というのは、日本の 将来を考えても、コミュニティーにおいてす ごい重要なテーマになると感じました。こう いった非営利のコミュニティーにおいて何か を強制したり、ノルマを設定したりしてしま うとコミュニティーの構成員が息苦しさから 離れてしまうことが考えられるので、こうい った無理をしない、いわゆる緩い連帯みたい なものが重要なんではないかと感じました。

これは先程の老稚園だったり、貝口ビアパークといった所からも同じような雰囲気が感じられたと思います。

こういったコミュニティー形成の活動について、まずは主体的に活動が起こっていることで無理のない活動が続くこと、それによって持続可能なコミュニティーが形成されているという点が挙げられます。

次は、持続可能性、2つ目の対馬市のモデル要素を挙げさせていただきます。紹介したいのは、われわれが対馬で出会った銭本慧さんという方です。合同会社フラットアワーという会社の代表なんですけれども、彼は元々東京大学大学院で博士を取得したいわば生粋の研究者だったにもかかわらず、2014年に対馬市に移住されました。そのまま会社を立ち上げて、水産業の現場で現在も活躍されています。フラットアワーとは水産資源の減少や燃料代の高騰、後継者不足などいろんな問題に直面している漁師のメンタリティーを理解し、水産業の情報を現場から発信することにより持続可能な水産業の実現を目指すためにつくられた会社です。

フラットアワーが何をしているかというと、1つ目は魚介類の直販です。これには、

一匹一匹にきちんと付加価値をつけることで、過剰漁獲をやめても収入を確保できる漁業を実現しようという狙いがあります。2つ目は対馬市の自然を身近に感じてもらう、グリーン・ブルーツーリズムという事業です。3つ目は水産研究のお手伝いをする研究コーディネートです。こういった3つの活動を基に、持続可能な水産業の実現を目指されているという会社です。

さて、銭本さんの活動の問題意識についてお話を伺ったのですが、現在の水産業の一番の問題点である「獲った者勝ち」の体質への危機意識を出発点にしています。この体質が一因となって水産資源の減少がもたらされました。私たちは、この「獲った者勝ち」の水産業と似た図式が現代社会にもあるのではないかと考えました。すなわち、私たちの生活の中にもう溶け込んでいますが、市場原理主義そのものもおかしいのではないかという問題意識が生まれたわけです。

どういうことかというと、市場原理主義がもたらす過度な競争原理というものの裏で、私たちは常に見えない恐れと闘っているのではないかという意見が出ました。社会に出たら、給料に反映される会社の先行きに対する不安はあります。職種や役職といった社会的地位によって人間性が判断されるのではないかという偏見への葛藤があります。そして負け組というレッテルを貼られたくないという焦り、われわれ学生も社会に参加していく立場として、こういった暗い空気を感じてしまうときがいろんな場面であるように思います。こういった流れが行き過ぎた結果として、社会病理として自殺・うつ病・いじめ

過労死といった社会問題まで発生してしまう のではないでしょうか。われわれを取り巻く 市場原理主義が個人の生きづらさを生んでい るという現実に、われわれは目を背けている のではないでしょうか。

さて、まとめると銭本さん、そしてフラットアワーが気付かせてくれたこととは、物質的な持続可能性を重視することだけでなくて、われわれが普段身近に感じている個人の生きづらさに関する精神的な持続可能性というものも将来日本において考えていかなければならないのではないかという点です。

以上はサマースクールに参加した1年生が 主にまとめてくれました。これで僕の発表を 終わらせていただきます。ありがとうござい ます。(拍手)

#### (2) 学生団体発足の決意表明

**萩原**:では、続きまして、私のほうからサマースクールの活動を経まして、われわれが設立しようとしている学生団体についてお話しさせていただきたいと思います。

先ほどまでの対馬の魅力・コミュニティー・持続可能性という3つの発表はどれもサマースクールに参加した1年生が考え、発表してくれた内容でした。これらは普通に、ただ地方に行って課外活動をするということよりも、さらにもう一歩踏み込んで思考を重ねてくれた内容だったと思います。例えば、対馬の魅力に関しましては、単なる地方の魅力というものに疑問を投げかけて、新たな価値の創出というものを提案してくれました。また、コミュニティーについて発表してくれた班は、個々人の自主性を尊重して緩やかに活



動を続けていく新しいスタイルのコミュニティーを提案してくれました。持続可能性についても一般的な、物質的な持続可能性だけでなくて人々の精神的な持続可能性に目を向けてくれました。また、われわれの中にも個々人の可能性、活動が社会変革につながるのではないかということに気付いたという学生もいました。

彼らはサマースクールでさまざまなものを 学んで東京に帰ってきたと思うんですが、彼 らが共通して得たものがこちらです(スライ ド5)。新たな学びや、考え方に対するきっ かけを対馬サマースクールで得て帰ってきま した。

われわれは最初、今回サマースクールに参加できなかった、この授業を取っている皆さんにも、こういう経験をしてほしいなと考えたんですが、今回は、川井先生とか、さまざまな方々の協力によってこういう活動ができたわけで、学生個人というレベルになるととてもハードルが高い。例えば、地方にまず飛び込んでゼロから人間関係をつくっていくというのはとても難しいですし、学生個人での活動ということになると、どうしても大学外という活動になってしまうので、単位と授業

に追われている学生にとっては時間的にも厳しいんではないかなと思います。また、日本全国さまざまな地域がある中で、どこで何が行われているかも分からないのにどうやって行く場所を選べばいいのか、どうやってそういう活動を実現できるのかわからない、という学生も多くて、総じて地方で学ぶというのは学生個々人ではとてもチャレンジングになるのではないかなと思いました。

しかし、われわれは対馬で活動して素晴ら しい経験をさせていただいたので、より多く の学生にこういった経験を、地方で深い学び をしてほしいと考えました。そこで、この学 生にとっての地方で学ぶハードルを下げるた めに、われわれ学生主体の団体をつくること を決めました。では、一体これがどういう団 体なのかご説明させていただきたいと思いま す。

団体の活動目標としましては、主に3つ。 まず、①地方での学びを深いものにする。ただ行って話を聴くだけではなく、深い学びを みんなにしてもらう。そして、②学びから得 たことの実践。インプットした知識、考え方 をもとに自分たちで行動に移してアウトプットしていこう。③実践から発展へ。実践した 活動をどんどん未来につなげていって、どん どん団体の輪を大きくしていこうということ です。

では、まず初めに1ステップ目の「学びを深く」のところを説明させていただきたいと思います。今回サマースクールに参加した学生の中から、サマースクールに先立っての事前学習、活動後のフィードバックの機会が少なかった結果、どうしても観光の側面が大き

# 訪問した地域に向けた行動







- 一 学生の頃に 経験を積む



行動力を伸ばして 人材育成

#### スライドフ



くなってしまったんじゃないかという話があ りました。

そこで、われわれ団体として、例えば対馬でしたら一度行っているので、新しく来た学生に事前学習の機会を与えることも可能ですし、活動後のフィードバックもみんなでやればいい。そうすることによって、まず現地で何らかの体験活動、課外活動を行ったときに、もう既に自分の中である程度理解をした上で活動を始めることができるので、さらにその意味を深く追究することができる。さらに、自分で学んで能動的に活動を行っていくことで主体性が生まれて、モチベーションが向上して、地域で行う活動と活動の間の関連性も生まれて、より深く学ぶことができると思います。

では、その学びから得たことを実践するという団体なんですが、今回対馬で先ほどの発表にもあったように、さまざまな行動力のある活動家の方々のお話を聴きました。例えば、漁業をやっている方や環境活動をやっている方、ボランティアをやっている方、さまざまですが、そういった方々の考え方、知識をただ受け取って、「あ、すごいな、こういう人たちもいるんだ」で東京に帰ってくるだ

けじゃなくて、東京に帰ってきた後に、その地域でもいいですし、それ以外の地域でも、そういった考え方、知識をわれわれ学生が実践する。そうすることによってインプットだけじゃなくてアウトプットの機会を得ることができるので、より深くそういった考え方が定着するのではないかなと思います(スライド6)。

そして最後、「発展」ですが、先ほどのような活動で得た知識を実践するにあたっては、 学生個々人さまざまな趣味、関心があります ので、学生それぞれの特徴を生かしてさまざ まな活動に生かしてもらいます(スライド7)。

そうすることによって、活動の幅がどんどん団体の中で広がっていき、活動の幅が広がることで活動場所も広がっていくと思います。そうすることによって、学生がさまざまな地域に飛んで活動を行い、その地域同士がわれわれ団体、学生というネットワークでつながるのではないか。そうすることによって、日本全国にわれわれの団体の輪がつながればいいなというふうに考えています。

学生の中から提案があり、われわれ団体の 今後の活動として、観光促進や出張オープン キャンパス、伝統行事のサポート、地域のP V作成などを考えています。特に観光パンフ レットの作成は希望者が多いので、最初はまず対馬で作ってみて、この経験を踏まえて、 最終的にはわれわれの団体の輪を日本全国に 広めて、学生、地域、全てをつなげられるも のにしたいなというふうに考えています。

以上で、終わらせていただきます。ありが とうございました。(拍手)

# (3) 学生の人脈が小さなことから世界を変える

中川:最後に、私のほうからこの団体の展望 であったり、未来をどのようにつくっていく のかということについて簡単に説明していき たいと思います。

まず、ここまでの発表の振り返りで、活動を通してさまざまな交流の機会を得られたり、自らの専門分野を問わず学べる組織、全ての交流を通じて多様な人間関係を構築できるような団体としたい、ということは大体分かっていただけたと思うんですけど、これだと学生の成長のための団体なのではないかと思います。確かに、この側面もすごく強くて、結構学生のためになるような団体ではあるんですが、私たちの考えている団体って、それだけではないんですね。こうした団体に入っている学生の活動によって新しい時代のコミュニティーを創造できるのではないかと私たちは考えています。

なぜこの活動がコミュニティーを創造するのかというと、学生にはさまざまな人脈があります。そして多分皆さんも少し感じているかもしれませんが、高校、中学の頃、もしくはもっと上の社会人に比べると自由に使える時間がたくさんあります。そうした学生が行

っている、その団体の活動一つ一つが、人と 人をつなげる役割を果たす。この人と人をつ なげるっていうところが、これからの世の中 をつくっていく一つのツールになるのではな いかというように考えています。

うまくイメージがつかめないと思うので、 なぜこのように思い立ったのか、すごく小さ な話なんですけど私の実例みたいなものを簡 単に説明してみたいと思います。

僕は以前から川井先生と知り合いで、一昨 年の7月に初めて対馬に行って、さまざまな 体験だったり経験をしました。先生の授業の 中でも対馬関連の話がいっぱいあったと思う んですけど、1年以上、結構頻繁に対馬に行 っていました。私は釣りが大好きで、釣りが 好きな人には島は親和性が高いんです。釣り が好きですって言うと、大抵地元の人が喜ん でくれるので、「俺の船、乗っていけ」とか 言ってもらって、どんどん地域とのつながり ができてきました。1年以上行っているの で、もう完全に現地化したと地元の人から言 われます。市街地の定食屋とかに行くと、も うお馴染みの料理がすぐ出てくるぐらい、地 元の人みたいに思われるようになって、僕自 身はすごくうれしいです。

現地での活動内容について簡単にまとめると、地元の方々と農作業をやったり、海洋ごみの回収を他の学生と手伝ったりしました。あとは、これは完全に個人的な動きですけど、釣りで仲良くなった人の船に乗せてもらったり、この船を一緒に共同購入をしようよと言われて、言葉を真に受けて船舶免許も取ったりして、本当にアクティブに活動をさせてもらいました。





漁師の修行

こういう活動を通して、絶対に東京にいた ら会えなかったような人たち、外から対馬に 入ってきた移住者の人や、地元の偉い人と出 会って実際に対話して、それが新しい発見や 価値観を知ることにつながりました。

これを見ると皆さんは何を想像するかなと 思うんですけど(スライド8)、完全に漁師 の修行に行ってきました。冒頭で和田君が対 馬で生きることになりそうな学生の話、と言 いましたが、僕のことです。実際にインター ン、今まさに3年生で就活中なんですけど、 ちょっと漁師の修行もやってみたいなと思っ て、軽く言っただけなんですが、「じゃあ、 紹介してやるよ」と言われて、さっき紹介が あったフラットアワーの銭本さんの所で1~ 2週間お世話になって漁業体験をやってきま した。

このようにいろいろアクティブに活動をしてきたのですが、そんなことをやっているとだんだん不思議な依頼が舞い込み始めるんですね。地元の人から言われて関わった代表的な例を簡単に説明したいと思います。

ひとつ目は、条例を作るのを手伝ってほしいという依頼。唐突な話で驚いたのですが、 釣りをしている最中に仲良くなって、お世話 になっている人からの相談でした。今、対馬 でも、どんどん漁業資源が減っている。以前に比べて釣れなくなっているとか、以前にはなかったのに漁具が盗まれるといった被害が増えていて、そういうのを防止できるような条例を作りたいから、東京湾とか他の海の事情も知っているだろうからちょっと参加してくれと言われて市役所の会議に参加しました。そうしたら、長崎県庁の水産課の課長さんだったり、自衛隊の担当の人など島のすごい偉い人にたくさん会って、その人たちといくにたくさん会って、その人たちといけの問題じゃないよねという話にないよねという話にないよねといった話に広がっていきました。

今、対馬でも海は汚されているので、海を 活用した観光を増やそうとしているけれど も、ちゃんとルール作りをしないともっとひ どいものになっちゃうよねという話になりま した。僕は一緒に対馬を訪れた仲間に、いっ ぱい法学部に知り合いがいたので、そうした 先輩に相談しようという話が具体化しまし た。今は、その助言を参考にして、条例を作 るとなると難しいけど、ライセンス制度を導 入すればいいんじゃないかと言っています。 アメリカにはライセンスを買ったら海で遊ん でいいよ、釣りをしていいよという制度があ るそうです。それを法学部の人が提案してく れて、それで話がとんとん拍子で進んで、今 そういうマリンライセンス制度を導入しよう じゃないかという話もあります。

2つ目が、講演会をやらないかという相談です。僕が個人的に対馬に行った帰り際に仲良くなったおじさんがいたんですけど、その

人が韓国語教師の方で、話を聞いてみると元 NHKのプロデューサーで韓国語の教室のコーナーを製作されていたそうで、すごい仲良くなりました。その人が仰るには、対馬が大好きになったと。対馬の話から始まって、今、日韓関係を考えるような機会をつくりたいから一緒に講演会で喋ってくれないかと言われました。いつも打ち合わせ、打ち合わせと言って最後は宴会みたいなかたちになっちゃうんですけど、楽しく、事業になるようなおしていて、これもつながりがあったので地元のイベントとのコラボを計画して、今、いろいろ話し合っているというところです。

こんな小さな話なんですけど結構いろいろ あって、実際に僕も楽しくて好きでやってい るのですが、どんどん忙しくなっています。

ここで気が付いたんですけど、たった1人の人脈でこんなにいろいろ話が舞い込んで、いろいろな事ができるんだったら、もっと人数が増えて仲間が増えれば、もっと多くの企画ができるのではないかなと、シンプルな発想なんですけど思ってしまったのです。僕の場合は、それだったらそういう組織とか団体があればいいんじゃないか、つくればいいんじゃないかというふうに思いました。

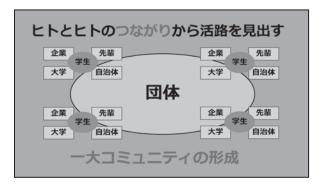
1年に及んで対馬を訪ねて悟ったことっていうのは、やっぱり人が成長するためにはいろんな価値観だったり考えを知ることが必要ですし、そのために変化を恐れないで飛び込んでみることが大事だということです。最初はちょっとチャレンジするのは怖いなと思っても一回活動領域を広げて、取りあえず飛び込んでみて学んだところ、結果として僕の場

合は自分の人生も豊かになったし、こんな活動ができてきました。

世の中を良くしたいとか、どうにか今の閉塞感のある現状を変えていきたいといった、 漠然としたものでいいんですけど、それを1つ、1個だけみんな同じ思いを持って行動する仲間が集まっていれば、世の中をもっとより良く変えられるんじゃないかなというように思いました。

この世の中にはびこる問題というのはたく さんあって、日本だけの問題もあれば海外で の問題もたくさんあると思います。こういっ たことに対する解決策は、日本政府が提唱し ているSociety5.0だったり、国連が定めている SDGsであったり、既に企業が行っている CSR活動だったり、問題を解決するための技 術や人材は徐々に育ちつつある段階ではある と思うんです。それを生かせるような人、本 当に困っている所にその状況を打破できるよ うな技術をきちんとつなげられる人、そうい う技術や人材をつなぐ役割を担うような場所 がないということが現状なんじゃないかなと いうように思うんですね。こういった問題に 対して、学生が関与したらどうなるかという ことを考えました。先ほども触れましたが、 私自身の考えとしては学生っていうのは一番 社会と純粋に交わるチャンスがあるんじゃな いか、大人に比べて利害関係が薄いし、自由 な時間もあっていろいろな活動もするし、結 構世の中と関わる機会が多いと思うんですね。

例えば、インターンや就活をすれば一般的な民間企業と交わるような機会もいっぱいありますし、人によっては留学して外国に行っていろんな友達ができたり、アルバイトをし



たり、サークル活動をしたりなど、身近な活 動を通じて学生っていうのはいろんな人脈が 築けると思います。先輩、後輩の関係もそう ですし、同級生っていう関係もあると思うん ですけど、そういったつながりを生かせるよ うなやり方を一つつくっていくことができれ ば、それは大きな社会変革につながるのでは ないかなと思います。こんないろんな学生が 持っている人脈をつないでいくことができれ ば、そういったつながりの中から学生も成長 していくことができるし、世の中のためにな るようなコミュニティーを形成できるんじゃ ないかなというふうに考えています(スライ ド9)。例えば、ある学生が関わっている事 業でこういう人を必要としているけど知り合 いいない?って言われた場合は、その団体に 登録しているメンバーで当てはまる人がいた ら、その人を紹介すればいい。自治体で何か こういうプロモーションとかを作りたいんだ よねと言ったら、この団体に登録してもらっ ている企業や、Webマーケティングをして いるところとつないであげたりする。そうい う、人と人をつなげる作業の中で学生自身も 成長して、自分に必要なノウハウを身に付けて いけるし、人脈も築けるというのは、これはあ る種、一つのコミュニティーの形成になるんじ

ゃないかなと思っています。

こういうことを学生がやりたいと言って、 楽しく、ここが一番大事なんですけど、楽しく 自分のやりたいことをみんなに提案して、一緒 に実行していくということをずっと続けていけ ば、いつかは小さいことから世の中を変えられ るんじゃないかなというように本気で思って います。

こうした一つ一つのつながりが最終的には世の中を変えることができるし、それがこの授業のテーマでもあった「21世紀のまちづくり」なんじゃないかなというように思いました。

発表は、以上です。(拍手)

川井:ありがとうございました。まとまりの ある発表をしてもらったと思います。もう一 度、拍手をお願いします。(拍手)

さて、いまの発表を聞いて、みんなは何を 感じましたか。これまで授業で話し合ってき た内容が体験を通して意識に織り込まれてい たかと思うのですが、いかがでしょう。それ では学生発表を踏まえて、次は西村周三先生 のお話を伺いたいと思います。

それでは西村先生、よろしいでしょうか。

## 4. <西村先生のお話>

**西村**:はい。わかりました。西村と申します。 よろしくお願いします。

最初にちょっと自己紹介をしますが、さっきご紹介いただいたように私は元々京都大学で経済学部の教員をしておりました。そこで30年余り教員をやっていたんですが、その後、国立社会保障・人口問題研究所の所長を

しましたので、今日は経済と人口の話を少し だけしようと思っています。

ただ、その前に今の発表を聴いていて、私 も対馬に3回行っているのですごく親和性が あるんですが、一番感動したのは最後の中川 くんがお話ししてくれた、学生が介入すると 一番社会と純粋に交わるチャンスがあるとい う話です。多分皆さん若い方々は、中沢先生 のような偉い先生と接する機会ってほとんど ないと思うんです。私も自分で言うのは変で すが、社会保障・人口問題研究所の所長なん かとはあんまり日頃話しませんよね。そうい う意味で、いろんな方と接する機会ってどう しても、学生同士はもちろんあるんだけど、 年を取った、名を成した人の話は一方的に聴 くだけで、いろんな対話をする機会もそんな にない。それはやっぱり僕は今の時代、大変 残念で不幸なことだと思っています。できた ら、やっぱりいろんな人の話を聴いて自分の 意見を言い、相手の意見も聴きということを やる機会がもっとできたらいい。実は、さっ きの対馬の体験は、そういう機会です。特に 対馬市って私も驚いたんですが、市長さんを はじめ皆さんがすごい面白い考えを持ってい て、僕らが普通考えている役人っていうイメ ージじゃないんです。飲み会をやると必ず、 そこで出た意見を行政に反映しようとすると ころが私は一番びっくりしました。

もう一つは、実はこの後ちょっとスライドでお話をするんですが、私もさっき紹介があった銭本さんとお話をしました。しかも、そのときは、実は銭本さんとの話をするんじゃなくて、銭本さんと一緒に、昔対馬で漁師さんだった方の話を聴きました。そのときに一

番びっくりしたというか驚いたというか、感動したのは、その方が最近は漁業に対する規制がすごい厳しくなって、魚を獲りたいだけ獲れないんだよという話。そのときに、「獲りたいだけ獲れないんだよ」と仰ったんですね。皆さん、どう思います?釣りに行ったら、もう獲れるだけ獲りたいと思いません?でも、それは素人の浅はかな考えで、獲り過ぎたら駄目なんだよという話ですよね。仮にあなたが漁師さんになったとして、どこかへ行って獲り過ぎたら駄目なんだよ、カニをいっぱい獲ったらめちゃくちゃ高く売れるのに、獲り過ぎたら駄目なんだよと言われたらどう思う?

実は、恐らく僕らの世代と違って皆さんの 世代は、もう獲り過ぎたら駄目なんだよとい うことを考える時代がきているんですね。だ から、獲り過ぎないようにどうするかみんな で知恵を出し合いましょうというのがさっき の話の一番感動を受けたことです。皆さんの 中には将来、お金儲けしたいと思っている人 いると思います。私はそれ、経済学者なので 賛成です。お金儲けしようと思うの、 賛成 (笑)。でも、お金儲けし過ぎたら駄目なんだ よと言われたらどうする?というような話が これからの時代に、私は大変大事なことだと いうふうに考えました。これがさっきの 感想です。

今日は、簡単に経済と人口のお話をします。さっきの話にあったけど、これからこのネット社会は、私も実はこのネットでニュースとかいっぱい見ています。皆さんも見ていますか?ニュースぐらい見ようね(笑)。今日何があった?イランとアメリカはどういう

関係になっているか、ニュースでちょっと見 ることができますよ。ちょっと見ましょう ね。ご承知のように最近は人工知能が活用さ れはじめたから、一回見たら、また見たくな くてもくるんですね。そういう仕組みですよ ね。ただし、これをやっていると、私も実は 自分の経験で分かるんですが、短慮と熟慮、 要するにぱっと思い付くことだけ考えて、そ れで忘れちゃう。それが今のIT社会の特徴 です。僕ら年寄りは本を1冊読み切らないと なかなか意見を言えないから、2ページぐら い読んで何か意見を言うのは無理でした。し かし、今はそういうことができる社会なん で、2ページ読んで意見を言うことができま す。それを短慮といいます。でも、昔の人は そんなことはできないので熟慮しました。こ の違いを話したい。よくある短慮の一例です が、経済は結構、難しい。「経済はこれから どうなりますか という質問は授業でも1年 ぐらいかけて一生懸命やらないと、しかも変 な先生だったら変なことばかり言うから、い ろんな先生の話を聴かないと難しい。ぜひ覚 えてほしいのは、フロー・ストック・伸び率、 この3つを総合して経済は考えます。もちろ ん経済が良くなっても幸せとは限りません が、しかし同時に幸福の一つの要素として経 済はあります。そのときに毎月どれだけ給料 をもらうか、どれぐらい小遣いがあるかとい う、毎月入ってくるようなものがフロー。貯 金がどれだけあるかというのがストック。実 は、今の日本の社会の病気は、給料が増えな いと幸せにならないということです。つまり フローが減るとやっぱりあんまり良くないと いうのは分かるけど、増えなくてずっと同じ

でも別にいいじゃないかと考えることは、悲しいことにさっきの話と関係するんですが、 年寄りはできない。たくさん魚を獲って金儲けしないと幸せにならない。去年よりも今年、昨日よりも今日のほうが増えているほうが幸せ。昨日と同じだったら幸せじゃない、ここがポイントね。そういう話を考えて、経済をこれから見るようにしましょう。

2番目、SDGs無しの議論は空虚です。これからの社会は「持続可能性」ということを一つの大事なキーワードとして考えましょう。例えば、ガソリンを燃料にする自動車は、もうやめないとだんだん温暖化に悪影響を及ぼします。かといって、もちろん自動車を使わない暮らしというのはこれからなかなか難しいので、そういう問題として持続可能性というのを考えましょう。

もう一つは、これはもうサマリーだけ話を しますが、世界の中の日本の位置付けはどう なっているかということを、経済を見るとき には考えないといけない。つまり日本が一生 懸命頑張って、今も実は一人当たりの所得は 減りはしていなくて、ほとんど変わっていな いんですね。変わっていないけど、例えば中 国がどんどん豊かになっていくと、悲しいこ とに日本人は不幸せになったりする。それ、 嫉妬ですよね、はっきり言って(笑)。自分 の収入は全然変わっていないのに、中国がど んどん追い付いてきたら悔しいっていう、そ の気持ち。これをどうやってなくすかという 議論があって、そういう考えに基づく経済理 論も出てきています。経済については以上で 終わり。

次は私の専門の人口問題です。周知のよう

にお年寄りがこれからすごい増えて子供が減る、少子高齢化は厳然とした事実です。特に 高齢化の話は、皆さんには考えを変えようと いうことを言いたいんだけど、少子化は多分 変わりません。

少子化という現象についてはどういうふう に考えるか、一つだけヒントを申し上げま す。実は、先程の経済の話で、世界のGDP に占める日本のシェアがどんどん下がってき ています。日本のGDPはほとんど変わって いないのに、他の国が増えるからシェアが下 がってきます。しかし、実はこれが近い将 来、経済的なパニックをもたらす可能性をは らんでいます。どうしてかというと、例えば 今後、世界の中の日本は駄目になるでしょう か?1970年ごろの状況だったら、日本が駄 目になったら、世界中が「大変だ」と大騒ぎ するんです。ところが、2022年ぐらいになる と日本のGDPのシェアは5%ぐらいになる ので、「大した問題ではない」というふうに 他の国が思うかもしれない。だから、そうい うことに対する備えも考えておく必要がある。 そのときは、さっき言ったように豊かな暮 らしは欲しいけども、ある程度豊かさが下が ってもいいようにする。「ある程度」ですよ。 この「ある程度」が大事で、所得が半分にな

最初のポイントですが、ますます長生きするんです(笑)。私、間もなく75歳になります。 でも、結構元気です。最近病気しましたが、

ったら、これはもう大変です。しかし、2割

下がるだけだったら、それなりの暮らしをし

て豊かさを享受できるかもしれない、その工

夫が大事です。その意味で、人口について見

ておきましょう。

元気です。こんな話は知識としてだけ知ったらいいでしょう。べつに自分が80歳になってどうする、そんなことを考える必要はない。そういうことを考えるという異常な経済学もありますけど、考えなくていい。『日経新聞』を読んでいると、10年後どうなるかと考えて脅す記事がたくさん出ます。10年後、ほとんど間違いなく生きています。まだ10年後はいいんですけど、皆さん60年後生きていると思いますか?「60年後、生きていないと思うか」と尋ねる調査をすると、平均よりも早く死ぬと思う人が多い。それはおかしい。矛盾。だから、長生きする。その時代に合った設計を理解しないと駄目というのが、まず一番のポイントです。

年寄りって何歳ぐらいをイメージするでし ょうか?実は、みんな違う。若い人は自分の 老後は想像つかない。でも、65歳と85歳はど ういうふうに違うかを、ちょっと勉強しまし ょう。自分の将来を考える必要はないんで す。人ごととして、周りにいっぱい85歳の 人々がうろうろする社会はどういう社会かっ ていうことを考える必要はあるということで すね。高齢化はこれから、だから近い将来は 75歳以上を年寄りと言うことにしようと。あ と10年ぐらいしたら、85歳以上にしようとい うことになるかもしれません。年寄りのイメ ージを変えないと駄目なのです。もう一回言 いますが、自分の将来を考えろと言っていま せん。そんなの分かるもんか(笑)。60年後 どうなるかなんて分かるもんか。しかし、今 の年寄りがどんな暮らしをしているかは勉強 する必要がある。そのときに、「高齢」のイ メージを変える必要があるというのははっき

#### りしている。

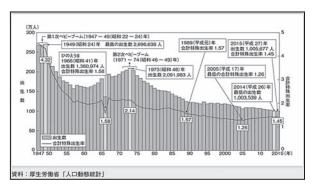
子供が減るっていうことに関しては1つだけ注意したいことがある。それは出生数と出生率は違うものだということです。最近ちょっと出生率は戻ってきています。だから大丈夫かというと、出生率がすごい上がってきても、お母さんの数が減っているので出生数はあまり伸びてこない。団塊の世代が間もなく75歳を超えます。その子供たちは、最近40歳を超えました。すると、ポテンシャルなお母さんの数が減るので、出生率が上がっても子供の数は減る一方です。そういうことだけは知っておく必要がある。

3番目。ぜひちょっと勉強してほしい人口

問題。どうしてかというと大都市と過疎地 域、地方都市それぞれで年寄りの数のウェイ トが違う。もう間もなく、地方は年寄りの数 が減り出します。びっくりでしょう。今まで 増えてきて、今の地方は年寄りの数が多く、 大都会は若い人が多いイメージです。しか し、これからは地方で年寄りが減り出します。 ただ、ちょっと深刻なのはさっきの対馬の 話と関係するんですが、魚をたくさん獲っ て、腹一杯食べたいという人が年寄りだと言 う先入観を持ってはいけません、残念ながら そこに行って見ないと、ちょっと表現は良く ないけど、そこに強欲な年寄りがいるかどう かはわかりません。もちろん大都会にも強欲 な年寄りがいますからそれも合わせて、接触 しないと難しい。

過疎地域は消えるというふうに思う人が多いと思います。総務省は多くが消えると予想していました。今から25年ぐらい前に報告書

#### スライド10



を出してどんどん消えると言っていました。 ところが今、あんまり消えていません。消え る集落はゼロではないけど、消えてない。現 場を知らない人間が言うことは怪しいという ことを覚えておきましょう。そのことは、こ の本をご覧ください<sup>2</sup>。

今言った子供の数なんですが、これが子供の数の推移です(スライド10)。さっきのことだけ確認しましょう。子供は減る。そんな簡単に戻らない。個人的な意見を言うと、私は戻るにはあと20~30年ぐらいかかるんじゃないかと思っています。どういうことかというと、皆さんとぜひ議論したい点ですが、若い男女の間で、男がどの程度家事をするかということについて、男と女の考え方が、ほとんど変わらないようにならない限り、結婚数や子供数が増えないというのが私の予想です。

過去の推移を見たら分かりますが、減少傾向は簡単には説明できない。男女の関係についての海外の事例を考えると、専業主婦イメージがまだ残る社会では、人口は戻らないというのが私の予想です。

次の図は65歳以上、75歳以上が大都市で急速に増えるという表です(スライド11、12)。

<sup>2</sup> 山下祐介(2012)『限界集落の真実 - 過疎の村は消えるか?』ちくま新書。

都道府県別の高齢者(65歳以上)人口の推移						
	2015年時点の 高齢者人口(万人)	2040年時点の 高齢者人口(万人)	増加数 (万人)	增加率	順位	
沖縄県	28.2	43.6	15.4	+55%	1	
排奈川県	217.8	286.8	69	+3296	2	
東京都	306.6	399.6	93.1	+30%	3	
埼玉県	180.4	229.8	49.3	+2796	4	
愛知県	178.2	223.8	45.6	+2696	5	
(千葉県)	161.1	197.3	36.3	+2396	(7)	
(大阪府)	231.9	265.3	33.4	+1496	(13)	
和歌山県	29.8	28.6	-1.2	-496	43	
島根県	22.5	21.5	-1	-496	44	
山口県	45.1	42.5	-2.6	-696	45	
秋田県	34.6	32	-2.7	-896	46	
高知県	24.0	22.1	-1.9	-896	47	
全国	3387.0	3920.8	533.8	+1696		

例えば総務省が発表している人口のピラミッドグラフ。もう一回言いますが、こんなものを単純に信じたら駄目(笑)。65歳以上が年寄りではありません。75歳以上が年寄りです。間もなく85歳以上が年寄りになります。

世帯数が大きな問題になっています。独り暮らしが激増しています。この問題をどういうふうに考えるか。過疎地域、居住地域が消えるかという問題も大きな課題です。

政府は一生懸命、人口減少に対する対策を やろうとしていますが、政府の政策が悪いと 言う批判があります。私も確かにそれはまず いという面がたくさんあると思いますが、で は、何をうまくやったら戻るかということが 問われます。もう一回言いますが、家の中で はご飯の用意、炊事、洗濯、さまざまな目に 見えない雑用が、もう本当に山ほどありま す。これを男女が平気な顔をして平等にする 社会が日本社会全体で広がるようになったら 結婚しようとする女性も増えて、子供の数は 戻ってくるのではないか。日本の人口の特徴 は他の国と違う。フランスなんかと違って法 的に結婚したら大体子供をつくる。フランス は結婚しないでもつくる。ちょっと細かい話 ですがそういったいろんな特徴がある。日本

スライド12

都道府県別の高齢者(75歳以上)人口の推移						
	2015年時点の 高齢者人口(万人)	2040年時点の 高齢者人口(万人)	增加数 (万人)	增加率	順位	
沖縄県	14.5	24.7	10.2	+7096	- 1	
埼玉県	77.3	124.6	47.3	+6196	2	
神奈川県	99.3	155.5	56.2	+57%	3	
千葉県	70.7	108.5	37.7	+53%	4	
滋賀県	16.0	24	8	+5096	5	
(景知県)	80.8	120.8	39.9	+4996	(6)	
(東京都)	146.9	206.7	59.8	+4196	(12)	
(大阪府)	105.0	143.3	38.3	+36%	(17)	
山口県	22.7	25.7	2.9	+1396	43	
和歌山県	15.0	16.8	1.9	+1396	44	
秋田県	18.9	20.8	1.9	+1096	45	
島根県	12.3	13.4	1.1	+976	46	
高知県	12.5	13.6	1.1	+996	47	
全国	1632.2	2239.2	607	+3796		

の特徴は大体結婚すると子供をつくる人が多いということを含めて、今のような特徴を前提とすると、さらに言えば、政府が家の中の家事の分担に介入するっていうことはやるべきではないし、やることも難しいし、皆さんの一人一人の考えに合わないので、なかなか政府がいろいろ頑張ると言ってもいろんな意味で無理がある。専業主婦になりたいという女性も多いので予想は難しい。

日本の社会には女性がちょうど半分、 5,000万人以上いて、そのうち若い女性は 2,000万人ぐらいいますから、その方々の専 業主婦願望をなくそうとするとしても相当時 間がかかるんじゃないかという、そういう結 論です。

以上です。どうも、ご静聴ありがとうございました。(拍手)

川井: 西村先生、ありがとうございました。 なかなかシビアなお話でしたね。先生は人口 問題をご専門とされる経済学者ですから、こ のような具体的なお話になるのですね。

さて、時間の関係もありますので続けてお 願いしたいと思います。では続けて、中沢新 一先生、よろしくお願いいたします。

# 5. <中沢先生のお話>

**中沢**:中沢です。明治大学の教員です。今日 の対馬の発表を見てて、いろいろ考えること がありましたね。

というのは、僕が大学の教員になったのは 1994年だったんですけれども、この大学じゃ ないんです。中央大学だった。そこに入って ゼミの学生を採って学び始めたときに、「あ、 この子たちは欠けているものがたくさんあ る」っていうのが、もうはっきり見えちゃっ たんですね。一つは、感覚がいろんなところ で狭くなっちゃって、遮断されている感じが しました。都会生活が長い子たちが多くて環 境との交流っていうのが、感覚とか想像力と か遮断されている感じが非常にしたんです ね。このまま、この人たちに知識とか情報っ ていうのを学問のかたちで注入していったと しても、人間としての発達ということを考え ていったとき、それは大変アンバランスなも のになってしまうだろうと思いました。何を したらいいだろうということをしきりと悩ん だんですね。

その頃、山形県の山奥から1通の手紙がきました。もう見ず知らずの人です。それは役場の職員をやっていた人ですけれども、うちの村へ来てくれませんかと。もう文字通りの過疎地です。日本で有数の豪雪地帯、大蔵村っていう所なんですね。そこへ来て山間地農業っていうのを一緒にやりませんかって、何か突然そういう手紙がきたわけです。僕はこれ、何か天の啓示のように思ったんですね。それをやっている人は舞踏をやっている人でした。山の中に住んで村役場に勤めて、そし

て若いときからずっと舞踏をやって、体とか 想像力というものを周りの自然の世界につな げるためにはどうしたらいいかっていうこと を考えていた人なんですが、その人が一緒に 学生を連れて農業をやりませんかと言ってき たんですね。1994年でしたけども、学生を連 れて行きました。

当時は、まだ持続可能性とか過疎地帯の問 題というのはそれほど社会で論じられている 時代じゃなかったんですけど、その時代に村 へ入っていって、もう過疎地でしたから山間 地の田んぼなんかぐじゃぐじゃになっていた んですが、それを全部元通りの田んぼに直し て、そこで田植えをして稲刈りをするとい う、そういうサイクルをかれこれ7~8年続 けたんですね。それは学生たちを大きく変え ていきました。しかも、その村っていうのは 伝統的な文化が非常に残っている所で、山伏 っていうのが残っているんですね。若い人た ちは山伏修行をするっていうことが伝統にな っていましたから、それをみんなで一緒にや ろうっていうことまで始めました。山伏って 一体何だっていうと、とにかくツーリズムの 登山とは違って、山の中へ入って、そして食 事を制限したり飲み物を制限したりして、い ろんなことを訓練するんですね。それを体験 して、農業をやって、ということを数年間続 けました。

そうしましたら、今皆さんが発表をされて きたようないろんな問題点を、学生の側が自 然に出てくる問題点として考えるようになっ て、一体何が今の社会で問題なのかっていう ことがごく自然なかたちで出てくるようにな る。それから、確かに皮膚も変わります。皮 膚の感覚が変わった。それから食べ物に対する感受性が非常に高くなっていて、それまでは自分たちで食事を作るために、野菜にしても、お米にしても、それがどういう所から取れて、それを作るために人々が何をやっているかということを知らないでマーケットで買っていただけなんですけど、それを全部自分たちでやってみると、自分たちが食べているものが一体何なのかというのがよく見えてきた。

そんなことをしているうちに、僕は同じ大学に長くいるのが嫌いな人ですから、中央大学はまあ10年ぐらいでいいかと思って、ほかへ移ることになったんです。そうしたら、そこでやっていた学生たちの何人かが、向こうへ定住を始めちゃったんです。僕は全然勧めもしなかったんです。1人はプロの山伏になっちゃって、そして、自然農法による作物でお料理をするということまで始めちゃったんです。数人の学生が定住を始めちゃったわけです。

その頃はまだ I ターンなんていう言葉もない頃だったんですけれども、実際にそういうことを始めてしまって、その子たちとお酒飲んでよく話をするのですが、幸福というのは何なのかということをしきりとその人たちが考えるようになっていった。お金の問題、人間にとってお金というのは何なのか、それから、人と人とのつながり、コミュニティーですね。人と人とのつながりは一体何を人間にもたらすのか。もちろん村に暮らし出すといっぱいです。お付き合いことがいっぱいです。お付き合いことだらけですから。でも、その面倒くさいこ

とを超えていったときに何が見えてくるかと いうことをはっきり意識するように、理解す るようになっていった。

その人たちはいまだに山形県に住んで活動を続けています。結婚して子供もいる人たちもいます。今日の発表を見ていて、「ああ」と。自分が二十数年前にやっていたことというのは、こういうふうな形にまた今、発展しつつあるんだなということを実感しました。

実のところを言いますと、僕は対馬に通い出して、いろいろなことを研究し始めたのは2013年なんです。なぜ対馬に行くようになったかということを考えてみると、皆さんがいま問題にしているような問題点というのが世界的に言語化されて、そして、どういう人間の社会の未来について意義があるかということが言われ出した時代です。その時代に対馬というのは非常に重要だと僕は思いました。

皆さんもmarginalという英語はご存じですよね。marginとかmarginal。経済学を勉強している人は、限界効用とか。限界というのがmarginalという言葉になっていますから。もう一方は限界集落。あれもmarginal village。marginal、つまりへりの部分に属している。へりの部分にあるものの重要性。それがおそらく21世紀にとって重要な意味を持ってくるだろうということの直感みたいなものに突き動かされて、僕は対馬へ通うようになりました。

対馬は文字通り、いろんな意味でmarginal な場所です。それは日本という世界の marginal、境界の場所である。もう海峡の向こうには釜山が見えますから、韓国の世界が

広がっている。それから、実のところを言うと韓国だけじゃなくて、大きな影響力を及ぼしているのは中国です。この影響力がひたひたと寄せている対馬という場所。

では、このmarginalな対馬という場所で、 人々はどういうアイデンティティーを持って 生きてきたのかということを考えてみると、 これは非常に面白いんです。実のところを言 うと博多より韓国の釜山に行くほうが早いん です。船で行っても博多から行くよりもずっ と近いんです。昔の人はよく封切りの映画は 釜山へ行って見ていたみたいですから。昔と 言っても1950年ぐらいかな。いかだに乗っ て、釜山へ出かけて、映画を見て、お酒を飲 んで帰ってくるということをやっていたとい う話をおじいちゃんから聞いて、とんでもな いことやっていたんだなと呆れましたけれど も、それほど近いんです。

にもかかわらず、対馬は韓国に属したことは一度もないんです。政治的に属していないというだけじゃなくて、文化的にも韓国の文化とは違う文化を持続させているんです。かといって韓国と仲が悪いかというと、そんなことは全くないです。韓国の人たちとはごく自然に、温かい関係を保ち続けていますし、かつて行われていた朝鮮通信使の記憶というのはいまだに生きていて、朝鮮文化に対しては非常に理解が深い。同時に、しかし自分たちの生きている文化の世界は日本に属している。

これは実は非常に古い時代からそうだった んです。先ほどの学生さんの発表の中で、元 寇からということを言いましたけれども、そ んな新しいことを言っちゃ駄目だと思います ね(笑)。やっぱり縄文時代ぐらいから、こ の世界は自立しているんです。対馬はもう本 当に古い時代から自立しています。縄文時 代、それから弥生時代というのがあります。 弥生時代というのは稲作の技術を持ってきた 人たちが中国を通って、南朝鮮を経由して対 馬へ最初に上陸しているんです。最初に対馬 に上陸して、今度は向こうに博多が見えます から、北部九州へ稲作の技術を持っていっ て、日本に弥生時代が始まる、その最初の発 端を作ったのが対馬だったわけです。その頃 のことを考えてみると、実は南朝鮮と対馬、 北部九州というのは伽耶と呼ばれる一つの世 界でした。言葉もおそらく同じだったと思い ます。それから結婚も自由に行われている世 界でした。

朝鮮半島の政治的な情勢はまだ非常に流動的でしたから、百済とか新羅が形成されてきて、だんだんアイデンティティーが朝鮮半島自体に確立されるようになってくると、伽耶の世界というのはだんだん南のほうに孤立してくるようになるわけです。広州や釜山あるいは木浦とか、こういう地帯は長いこと伽耶世界の一員だったわけです。最後に残ったのが任那という日本府が残ったわけです。ただ、文化的には一つの大きい世界です。

伽耶世界のことは、皆さん日本史のことを考えるときに、これからよく頭の中に入れておいてもらいたいんですが、南朝鮮から中国の黄海の沿岸まで含めますが、対馬、それから北部九州、あと瀬戸内海を通って大阪までなんです。大阪湾。これが一つの世界を形成していた。だから、大阪はいまだに在日の朝鮮人、韓国人の方が非常に多くて、大阪は日

本の中でも多文化との共生が非常に古い時代 から活発に進んでいます。そういう大きい歴 史の流れがあるんです。

その中にありながら、対馬は自立性を保ち 続けていた。marginalがあるということの意 味はこういうことです。つまり境界線上に立 って、自分は何者であるかということを自覚 しているんです。自覚していますから、自分 たちの世界を自分で作ろうという意識が非常 に強かった。ですから、徳川時代になって、 今度は対馬というのは朝鮮と中国とのちょう ど中間地点になります。そして、こっちには 日本があるわけですけれども、このどっちに も属さなかったわけです。自分たちは政治的 には日本だけれども、しかし貿易の一切は対 馬が握っていました。ですから、かなり自由 勝手なことをやっていて、そして、自分たち の自立性というのをずっと保ち続けていた。 言葉は北部九州とよく似ています。神社とか 宗教も日本と同じです。しかし、精神構造は 朝鮮半島とか中国のほうに自在に広がってい る、そういう世界を対馬の世界の人たちは作 っていたんです。

それは例えば中世になっても変わりません。でした。中世になってくると、南のほうに豆酸という村がありますけれども、そこが中心地になります。そして、豆酸と、今度は太宰府が非常に交流を強くしていきましたが、そこで支配していた有力層というのは、阿比留さんという人でした。対馬に行かれた人は阿比留さんという人に何人か会っていると思います。学校の先生に阿比留さんが多いのですが、阿比留家というのが対馬の世界で重要な役割を果たした。つまり、marginalな世界で

生きるということは、自立性を非常に重要視して、彼らは完全に日本に所属しているわけでもないし、ほかのどの世界に所属しているわけでもなくて、対馬の世界なんです。このmarginalな世界で自分たちの自立性を保ってきました。

そして何度か持続可能性という言葉が出て きましたが、持続可能性ということは具体的 に何かというと、人間の世界の中だけでは自 立しないということです。周りの環境、自然 世界と回路が作ってあるということです。周 りの環境世界というのは人間の世界とは違う 原理で動きます。人間の世界というのは社会 とか貨幣を持つようにする経済で動いていき ますけれども、それを取り囲んでいる周りの 自然世界というのは違う原理で動いていま す。これは循環で動いているわけです。大き な循環サイクルを持っています。これは地球 につながっている、あるいはもっと言うと字 宙につながっている循環サイクルが人間の世 界を包んでいるわけです。その中で、島のよ うにして人間は生きています。この人間が島 のようにして生きていて、自然の世界から切 断されて、孤立してしまうとき、大変危険な 状況が発生する。それが今、本当に危機的に 人間を危険なところへ追い込み始めていま す。大きな循環と人間の営みが断たれてしま う。

その一番大きい原因は、おそらくは貨幣経済です。お金の経済というのが人間の意識を内側にこもらせていって、外の循環のサイクルを遮断してしまっています。そのために都市を作ります。何で人間が都市なんかを作り出すかというと、自然の循環サイクルとは違

う、自分たちだけの世界を自立させようとするから、これを作り始めます。古いですよ。 8,000年ぐらい前から人間は都市というのを 作り始めるわけです。

ところが、地方の都市も、それから田舎の 地域も、それとは違う原理で実は動いていま す。それは循環というものに自分たちの世界 をつなげていくわけです。いろんな形でつな げます。1つは生業です。農業、漁業、これ は否応なく周りの自然世界に自分たちがつな がっていきます。それから、伝統の文化とい うのがある。伝統の文化というのは人間の意 識を外の世界へつなげていこうとします。こ ういういろんな装置を通じて人間は循環して いく世界の中に自分をつなげていきます。す ると、持続可能性が可能になってくるわけで す。

ところが、人間が内部に自分たちを切り離 していくと、その中の功利性とか、効率とか いうことだけを優先するようになります。す ると、例えば、今日あるような自動車の社会 が生まれてきます。エネルギーをどこから供 給してくるか。産業革命を作ったのは石炭で したけれども、石油になって、原子力、こう いうものがエネルギー源として、自分たちの 世界の中で循環し始めます。すると、排気ガ ス問題が出てきますが、今日の地球温暖化問 題が複雑なのは、実はそこにもっと大きい循 環の問題が絡んでいるからです。人間の世界 が作り出していく二酸化炭素の排出、これが 最も大きい引き金を引いていることは確かで す。しかし、それは地球というものが、もっ と大きい宇宙の中で運動している循環に関わ っています。太陽黒点活動です。太陽黒点活

動と結びついています。

ですから、地球の温暖化というのは、実は何遍も起こっています。縄文時代にも起こっていますし、それ以前にも何度も起こっていて、大きな、なだらかな変化を通して、地球は環境が変わっています。縄文時代には、この辺はとても暑いところでしたから、今の温暖化の問題をもう一段広い目で見ていく必要があると思います。

もちろんグレタ・トゥーンベリが言っていることは本当です。みんながこれはやらなければいけない。二酸化炭素排出量を減らしていく。これはもちろんそのとおりですが、問題はそこで人間のやっている営みだけを考えるだけで問題は解決するかというと、そうじゃない。一番大事なのは人間と自然の間に回路を作って、循環していく宇宙のシステムと人間の世界の間にツールをいっぱい作っていくことだということです。

これは、しかし都市生活の中ではなかなか 実現することが難しいです。ところが、 marginalな場所であるとか、地方都市では、 小さい規模でこれを実現していくことが可能 になっているわけです。学生の団体が目指し ていることはとても楽しいと思います。その ときに一番注意しておかなければいけないの は、あまり大きいことを最初から考えないこ とが大事だと思います。

ドン・キホーテはまずいんです。ドン・キホーテは好きですけれども、あれをやられると周囲が迷惑しますから。一番いいのは、この間、アフガニスタンで殺されてしまった中村哲さんというお医者さんが言っていた言葉です。「一隅を照らす」という言葉をあの先

生は自分のモットーにしていました。「一隅を照らす」という言葉は最澄の言葉ですけれども、小さい範囲でいいんです。小さい範囲でそこを照らし出すという活動を続けていくこと。あの中村さんの活動だって最初は1つの谷だったんです。小さい谷だったんですけれども、今やアフガンの広い領域に広がり始めていて、政治的な妨害や国際的な妨害がなければ、おそらく、アフガニスタンというのはもともと大変緑の豊かな世界ですから、そこに戻っていくことが可能です。「一隅を照らす」ということを実現するということぐらい難しいことはありません。

ですから、まず対馬という一隅を照らしてください。佐渡でもいいです。どんな小さい村でもいいです。ツシマヤマネコのことを考えるだけでも、人間の心は循環の中に入っていきますから、これを考えるだけでも私たちの世界は変わるんです。小さくていいから変えていくことが可能で、自分がやっていることは小さいなと思ってがっかりしないはうがいいと思います。大きいことなんかは実現しないんです、実は。大したことはしません。実際に世界を変えていくことは小さい、徐々に世界を変えていくことになっていくと思います。

そういう活動を川井先生がここまで引っ張ってきてくれているというのは、僕はなかなかうれしいんです。最初の頃、僕と川井さんは、いろいろやりましたよね。みんな失敗して、失敗を重ねてきましたけれども、対馬でこういう成果を持ち始めて、しかも積極的にやっていく学生たちが出て、多分中川君は定住するんじゃないかなと思っています。家族

を作っちゃってね。そこに定住する人たちも 出てきて、小さい一隅が変わっていく。対馬 というのは地政学上、最高の場所です、日本 の中で。おそらく今後もっともっと重要性を 増してくる場所です。そういう意識を持って 活動していただきたいなと思います。どうも ありがとうございました。

### 6. 質疑応答

川井:ありがとうございました(拍手)。それでは学生たちに質問や意見を求めたいと思います。せっかくですから先生方にいろいろ伺ってみましょう。射程が広がりましたね。この授業の深層にあるヒューマニズムとコスモロジーの融合というテーマを、お二人の先生が見事に演出してくださいました。これをつなげていくのは難しいことだけれども、そこまで意識を展開させていくことが、これから21世紀を生きるみんなにとって必要なことかな、とわたしは思います。

2つの違った側面からのお話、それが不思 議なことに、どこかで融合してくるのがわか ったかと思いますが、そんなことを含めて、 みんなの意見を聞かせてください。はい、お 願いします。

内藤(学生): 西村先生、中沢先生、貴重なお時間をいただきありがとうございました。明治大学国際日本学部3年の内藤です。よろしくお願いします。川井先生の下で21世紀の世の中のことを検討していく中で、今の社会を動かしている資本主義について考えてきました。1点お聞きしたいんですが、資本主義の根底の思想は、私の理解では自由主義や、

パイを広げるための成長主義といったものがあると思います。最近勉強していく中で、資本主義の限界といったことが、いろんな文脈でいわれているんですが、その中で次の何々主義といったものが21世紀の世の中を作るとしたら、その根底にある思想や概念といったものはどのようになると思いますでしょうか。

西村:難しい(笑)。私がもう、さっき言っ たように74歳、あなたは多分20代ですかね。 自分の過去を振り返ると、若い頃はかなり抽 象的に物事を考えるのが好きでした。それは どうしてかというと、ちょっと失礼な言い方 ですが、いろんなことをたくさん見てないか ら。そうすると、どうしても抽象的なことが 当然で、大事になります。中沢先生は、世界 でいろんなところを回っておられるので例外 なんですが、僕らが若い頃はそんなに世界中 いろんな、中村哲さんの話じゃないけど、ア フガンの灌漑のところを見たりということは なかった。ということで抽象的。今のご質問 は難しい質問という理由は、1つは、毎日の 僕らの暮らしが、現場でどういうふうに物事 を考えているかということがベースにあっ て、その抽象化したものが資本主義。さっき 私、1つだけ象徴的に申したのは、魚を獲る ときに、獲りたいだけ無制限に獲って、そう したら当然、銭本さんの話にもありました が、実はそれをかなり高価な値段で売ること ができるんですね。これが基本的に資本主義 の1つの象徴的な形態。しかし、そのとき に、さっきSDGsとか、自然との共生とか、 いろんな話が出たと思いますが、間違いなく 結論的に言うと、抽象的に言うと、そっちに

主義は流れていると思っています。しかし、 実はそんな難しいことを言いたくなくて、た とえば魚を獲っても、獲りたいだけ獲るとい うことをしない。先祖が何を言っているか。 雨の日や嵐の日はやめようとか。もちろん機 械、技術がどんどん発展すると、時化の日も ひょっとしたら獲れるかもしれないけれど、 しかし、それは法的規制によって、ある一定 限度を超えて獲っちゃいかんと決まっている んです。

そこで控えるかどうか。これが私の主義であって、明日、漁に行くのをやめるか、やめないでおくかというのは私の主義です。それは抽象的に言うとSDGsであり、まさに嵐の日なんだから、その日は嵐と僕らはどうやって共生するかという、自然の循環の中に自分を置くということではないかと思うのです。すみません、ちゃんと答えていませんが、半分は難しい。答え、分からん(笑)。僕は個人的にはこういうことを考えています。

内藤 (学生):ありがとうございます。

中沢:人間は10万年以上、地球上にいるんだけれども、そのうちの9万5,000年ぐらいは、いわゆる資本主義みたいな貪欲な考え方というのを持っていなかったんです。その9万年間、何をやっていたかというと、狩猟をやっているんです。ですから、猟師と同じです。海からいろいろ捕ったり、森からいろいろ動物なんか狩りしたりしているんだけれども、貪欲に取りすぎるということはなかったんです。ほぼ全くなかった。

それがここ8,000年間、人間が妙に貪欲に

なっているんです。何から始まったかと言うと、農業なんです。農業革命ということで、自然界が与えてくれるもの以上のものを人間が取れるようになって、作れるようになった。そこから今度はお金も出てくるし、市場も生まれてくる。人間はほかの動物より偉いと考えるようになりました。不思議なことに、そうなると神様が大きくなるんです。それまで人間の9万年間は、ほとんど目に見えない精霊みたいなものしか考えていないんですけれども、神様が大きくなってきて、ピラミッドであるとか、神殿とかを建て出すわけです。

それが実のところを言うと、資本主義の土台を作っています。今さっきというか、この200年間で資本主義が生まれたなんていう、そんな生やさしいものじゃありません。8,000年~9,000年です。長いことそれが、人間がかなり貪欲な意識を持ち始めていたにしても、かろうじて地球上の生態のバランスが取れていた理由は、石炭とか石油を地中から掘り出すということをしなかったからです。これが発端です。

石炭も石油も、実のところを言うと、数十億年前の太陽エネルギーが保管されていたんです。これを掘り出しちゃったわけです。これをエネルギー源にし始めたもんですから、一気に産業はスピードアップしましたけれども、もうそれは準備されていました。長いこと準備されていたんですね。

ただ、ここでヨーロッパと日本の大きな違いがあって、ヨーロッパの世界では9万年にわたる古い時代の人類の記憶というのをカットしました。ですから、本質的に都市文明が

ヨーロッパでは発達しました。ところが、アジア、とりわけ日本では、そういう文明は発達しなかったんです。縄文時代からの自然観、循環意識を新しい農業革命の稲作りと結合したんです。両方を、うまくバランスを取りました。その象徴が里山といわれるもので、里山は自然界になだらかにつながっていて、循環とうまくつながっています。そして、自然界のものをあまり取りすぎてはいけないという縄文時代以来の、9万年のほうの意識が持続しています。

ですから、日本の海岸部の漁師さんたちには、この考え方は濃厚に残っています。例えば、駿河湾のサクラエビ漁というのがありますが、このサクラエビ漁は厳格に、毎朝、翌日の漁獲量を決めています。獲りすぎると、その先のことを考えてみると漁獲量が減ってくるから、後りすぎるとそこで打ち切ります。どんなにたくさんサクラエビが獲れたとしても、漁を打ち切るということをやっています。それから、山形県の鶴岡では、タコ漁で同じ考えを持っています。タコが捕れすぎてしまうと、そこで漁をストップさせます。そうやってバランスを保っています。

この日本人の農民とか漁民の中にある英知というのは、非常に古い時代から蓄積されていったものをカットしていないからあるのです。ヨーロッパでは、最近になって、これがエコロジーとして復活するようになってきていますが、私たちは実はそんなことを意識しないでも、文化の中にそれが残っていた。にもかかわらず、それを改めて勉強してみないと身につかないような時代になってしまった。

だから、僕らはある意味で言うと、人間の中でもかなりいい線を行っている文化を持っている人です。ところが、これを捨てちゃうということをやったために、一番愚かな人類になりつつあって、化石賞なんかをいただいたりするようになるわけです。恥ずかしいじゃないですか。もともとそんな人間じゃないですよ、われわれは。ところが、それがあんな情けないものを渡され、「恥を知れ、日本人」と言われる。「冗談じゃない。それを今までやり続けていたのは、あんたらヨーロッパ人じゃないか」ということをはっきり心に刻んでいただきたいと思います。

川井:ありがとうございました。時間も過ぎてしまいましたね。もっともっとお話をお聞きしたいと思うのですが、残念ですが今日はこれで終わりにしたいと思います。もう一度、西村先生、中沢先生に拍手をお願いします(拍手)。本日はどうもありがとうございました。学生たちにとって、大変貴重な経験になったと思います。思い出に残る、記憶に残る授業として、みんなの財産にしてほしいと思います。

### ~補遺「対馬プロジェクト」について

本講座を受講する学生から希望者を募って 訪れた対馬市は、玄界灘に浮かぶ長崎県の離 島で九州の最北部に位置している。気候は東 シナ海と日本海をつなぐ対馬海流(暖流)の 影響を受けて比較的温暖であるが、冬場は大 陸からの強い季節風が吹き抜けるため寒さが 厳しくなる。島の約90%は山林で、標高200 mから300mほどの山々が連なり海岸線まで のびている。そのため大半の集落は海岸線に 点在し、住民とりわけ高齢者の多くは半農半 漁の生活を営んでいる。島の中央にはリアス 式海岸の名所となる浅茅湾があり、壱岐対馬 国定公園に指定されている。

IA共済総合研究所は約6年にわたり対馬 市役所ならびに対馬に暮らす住民の皆様と 「しまづくり」を推進してきた。「食・エネ ルギー・ケア」をキーワードに、農林漁業の 再生と6次産業化および第一次産業を核とす るCSV (Creating Shared Value) の構築や、 再生可能エネルギーの生産と活用に関する取 り組み、そして対馬における地域包括ケアの 基盤づくり等を内外の研究パートナーととも に推進してきたのである。この対馬における 「食・エネルギー・ケアを基盤とする農山漁 村地域の内発的発展モデルに関する実証主義 的研究」を「対馬プロジェクト」と名付け、 中長期研究として現在も推進している。この たび授業にご登壇いただいたお二人の先生 は、本プロジェクトのパートナーであり、来 るべき未来のあるべき姿を共有している同志 でもある。

このような活動によって築かれた信頼関係と、対馬に暮らす人々の多大な協力のもとで、「対馬サマースクール」は実現することができた。また「対馬サマースクール」開講に先立って、これまで多くの学生たちが「対馬プロジェクト」にも積極的に参加し、対馬市民との交流を通してプロジェクトをサポートしてくれている。本稿に登場する3名の学生は「対馬プロジェクト」にも参加する学生たちであり、「対馬サマースクール」の運営を学生サイドから支えてくれた。

逆さ地図を眺めれば、そこには日本が対馬を起点に大陸へとつながっていく姿が映し出される。人や文化の交流は縄文時代から途絶えることなく、いまもなお流動している。したがって地政学的、歴史学的、民俗学的関心事のみならず、文明論的視座からも対馬は日本にとって意味のある土地である。また対馬サマースクールに参加した学生たちは、都会では失われてしまった古来の生活様式に触れ、SDGsに込められた思想を島民の営みから感じ取り、創造的想像力(Creative imagination)が刺激されることで自らの人生を再考する機会にもなっている。彼らの成長を期待してやまない。